

アメリカの大学事情

日本人留学生の視点から

平野惇夫・鈴木元子

American University in the Japanese Students' View

Atsuo HIRANO, Motoko SUZUKI

1 はじめに

アメリカの大学に留学することは、一昔前には考えられなかったほど容易になってきている。経済的にも、距離感からも、さらにはインターネットなどの情報メディアの発達からも、気軽に留学を希望する学生が増えてきている。しかしながら、いざ渡米してみると、キャンパス内の異文化の壁の大きさに圧倒され、意欲も萎え、早々に帰国したり、当初予定していた単位取得や卒業、学位取得がかなわずに頭を抱えこむことになる。一方、日本では大学改革が着手されたが、まだまだ社会人教育、生涯教育¹については、アメリカの大学にならうことが多いだろう。大学院の整備も遅れている。

そこでこの小論では、日本人留学生として自らの体験を率直に語ることで、日本の大学では味わえないアメリカの大学教育の特異性を浮上させることを目的としたい。平野は、1983年3月、38歳にして中学校の英語教師から奮起してオレゴン州のマリルハースト・カレッジ (Marylhurst College) に留学、それからポートランド州立大学 (Portland State University) のサマースクールを経て、ペンシルバニア州立大学 (Pennsylvania State University) で B.A. の学位を得る²。帰国後は高校の英語教師に戻るが、9年後の1992年3月に、47歳にて今度はポートランド州立大学大学院に留学して修士号を取得した経験を持つ。鈴木も同じポートランド州立大学 (PSU) に留学しているが、それは1977年8月から1978年7月の一年間、文部省の「教員養成大学・学部学生海外派遣制度」³ の全額給費によるものであった。国立大学の英語科の三年生の夏に渡米し、PSUの英文科 (English) の科目の単位を取得して、翌年帰国、大学の四年生の秋に戻り、教育実習をし、卒業論文を書いて入学時の同級生と同じ年に卒業する。二人とも同様の体験をしているが、平野の方がより最近の留学であるので、平野の体験談を主軸に据えつつ、鈴木もそれに補足したり、説明を加えたりしながら、アメリカの大学事情についてまとめてみることにする。

2 留学の動機

英語教師であった平野がアメリカに留学することになった動機は、浜松市の聖隷学園講師であったアメリカ人女性、故アトウェル (Attwell) 先生の聖隷コミュニティー・カレッジ (通称) に参加したことに始まる。先生は英語だけではなく、アメリカの教育や文化などについても広

範囲に渡った講義をされた。日本にアメリカのコミュニティー・カレッジのような教育機関がないのを残念に思われ、聖隷学園で教えられたあと、その疲れを癒す間もなく、夕方からそこで社会人のために、英会話ややさしい米文学などの講義をされた。平野は、一週間に一回開かれるその学習会に、四年間無欠席で熱心に通った。

あるときアトウェル先生から、二カ国語を自由に話せるバイリンガル (bilingual) になるためにも、また自分の持っている才能や思考を伸ばすためにも、一週間に一回の彼女の授業だけでは足りないので、いっそアメリカの大学に留学して本格的に勉強してはどうかとの助言をいただいた。義務教育の英語教師としては曲がり角に来ていることを自覚し、37歳にして留学することを決意した。

もっと若いときに留学していれば、頭も体も柔軟で、覚えも早かっただろうにと悔やまれる反面、日本の学校という教育現場で経験を積んだこともまた利点に感じられた。日米の教育事情を比較することもできるし、アメリカの大学・大学院教育を苦労しながら体験することは、帰国後今度は日本人学生の教育に生かすことができると考えたからである。

少年時代より一生懸命英語を勉強してきたつもりであったのに、実際にアメリカに行ってみると、話すにしても、書くにしても、読むにしても、聞くにしても、十分満足にはいかず、もどかしく感じるとともに、日本での英語教育が時間をかけているわりに、実際に使える英語を教えていないとつくづく反省させられた。しかしこれは一個人の問題ではなく、日本における英語教育そのものが戦後五十年間ずっと抱えてきた大問題なのである。

ここでアメリカの大学・大学院教育の実体験を記録に留めることは、日本の英語教育者、学生諸君、また留学を志す学生や、その保護者の方々の理解を少しでも助けたいという希望からである。入学するのは容易だが、卒業するのは難しいアメリカの大学・大学院で、遊学ではなく、堅実に単位を取得して卒業するためには、経済力、体力、精神力とともに、アメリカの大学制度に慣れて、コミュニケーションや思考の道具として英語を使いこなせるようにならねばならない。そのためには色々な工夫と努力が要る。また逆に言えば、アメリカ留学を成功させるための鍵とも言える英語力は、どの程度の英語力が要求されるのかが分かっているならば、留学の前に、日本で十分に養うことも可能なのである^{iv}。今の日本の大学英語教育に要求されているのは、大学卒業生が外国人と自由に(物怖じせずに)英語でディスカッションをしたり、商談をすることができるというレベルで、そのために如何なる英語教育を学生に提供できるかというのが課題である。

3 マリルハースト・カレッジ

1983年3月にアトウェル先生の紹介状を持って、オレゴン州ポートランド市 (Portland, Oregon State) 郊外にあるマリルハースト・カレッジ (Marylhurst College) に向かった。この大学はまさに社会人のための大学であった。授業があるのは、平日では夕方だけ、土曜日は朝から午後までである。これは学生の職業の勤務時間外に時間割を設け、働いている人を受け入れることを主眼としているからである。主婦層が非常に多く、夕方6時頃になると、キャンパスは活気を帯びてくる。二十代の若い女性も少しはいたが、大半は三十六～七歳位の子育ての一段落した女性が多い。男性はと言えば、平野が履修した「諸文化における人間関係とコミュニケーション」というような授業では、三十人位のクラスで二人だけであった。

最も驚いたことは、授業中の熱気を帯びた教師と学生間の、あるいは学生同士の討論である。

まさに「燃えている」という感じで、学生のみんなが一丸となって授業に参加し、発言している様子は火花を散らしているようであった。外国人と言えば、私一人が日本人で、あとはみなアメリカ人、初めは早口で話されると分からないこともあったが、雰囲気とか、興味や関心に惹かれて、すぐに慣れてきた。しかしそれにしても、このような光景にカルチャーショックを感じずにはいられなかった。

現在の日本では、公衆の場で積極的に発言する女性も少しずつ増えてきているが、アメリカの大学のクラスのように、三十代、四十代の女性たちが積極的に彼女たち自身の声をあげている姿を見かけることはなかなかあるものではない。

福沢諭吉がイギリス議会を傍聴して、議員が喧嘩をしている如しに議論をしているのを見聞して驚いたと言うが、それを追体験しているようなものだ。講座の先生は年齢的には同輩のように見えたが、授業の進め方の上手さには舌を巻いた。学生一人一人が提供するどんな問題、意見にも、学問上の理論を適応して、学生をリードしていく。日常の家庭に起きる些細な事柄が、例えば、夫婦間の問題、子供の養育上の問題、会社内の人間関係などが、授業で討論すべき重要な意味をもつ学問的対象と化すのである。自分たちが生活する場から遠い、別の所に研究テーマを求めるのではなくて、自分たちの経験している生活の場での問題こそが重要な解明すべきテーマなのである。大学に来て、自分の周りの問題を研究し、新しい指針を得て、より豊かで幸せな生活を手に入れていく。だからこそ、大学に来ることに価値が生じ、学生たちが熱心になるのにも肯ける。身近な問題の学問的な解決が、学生自らにとってプラスであることが、まざまざと我々の目の前で示される。ここにアメリカ的、実際の、実践的合理主義思想が、大学教育現場に浸透していることを感じる。日本の、つまらない講義でも、卒業証書のためには我慢する式の構図はそこにはない。概して、アメリカでは学生は教師に挑戦的な質問をするように奨励されるが、日本では逆にそうするとその学生は社会の不適應者、もしくは変人のようにみなされがちである。ここは注意しなければならない。

講座の女性教師の指導の中心にあるのは、一人一人の個性を活用し、引き出すというものであった。私の例で言うと、クラス内のただ一人の外国人ということで、授業中によく「日本の社会ではどうか？」と聞かれた。そのときはまだアメリカに行ったばかりで、自分の考えを十分に話すだけの英語力がなく、一般的なことを簡潔に答えるだけだった。休み時間にも、ときどき学生たちが私のところに来て、日本の文化や社会について質問をしてきた。そこで、そういう質問にしっかりと答えたい、自分の意見を率直に思うままに言えるようになりたいというのが私の留学中の大きな目標になった。

4 課題 (assignment) の読書量の多さ

第二のカルチャーショックは、宿題に課される読書量の多さである。これはアメリカの大学一般に共通することで、勿論、英語を母語としない外国人だから苦勞したというだけではない。アメリカ人の学生も大学に入って初めてこんなに膨大な量を読まされるのである。クラスによっては、次の週までに数百ページ読む羽目に陥る。鈴木の実験では、文学の講座、例えば「アメリカ文学 期」という授業を履修すると、一週間で中編小説を一冊、二週間で長編小説を一冊学ぶという驚くべき進度なので（日本の大学では、訳読式でいくと一冊に一年はかかる）、文学関係の授業ばかりを一度に数コマ取ってしまうと、毎日、文学作品を一冊位読まなくてはならないようになってしまう。それにペーパー（日本の大学のレポート）も頻繁に課されるの

で、少し英語ができるからと言って英文科に留学する学生、または日本の大学での専攻が英米文学だったからといって、留学してからも英米文学を専攻するという日本人学生は、地獄の日々を送ることになる。

アメリカ人の学生によると、授業時間の三倍は予習に時間をかけているという。日本の大学生の一日約一時間程度の勉強とは大違いである。因みに、本学の学生にアンケート調査をした結果によると、「授業時間以外に1日平均どのくらい勉強していますか」の問いに、文化教養学科の一年生は、「30分程度」が52.4%、「1時間程度」38.7%、「2時間程度」8.9%という結果が出ている。二年生は、「30分程度」67.0%、「1時間程度」27.1%、「2時間程度」5.9%とさらに勉強時間は少なくなっている。

自分が抱える問題、クラスの討論で気づいたこと、友達の意見、先生の教えと、資料や文献から得た知識が、うまく自分の頭の中で処理されて、徐々に自分の新しい考えというものが形成されてくる。それをもって次の授業にまた積極的に参加せよ、というのである。学期の終わりには、これらをまとめてターム・ペーパー (Term Paper) を書くようになっている。それを教師は丁寧に添削して、コメントと評価をつけて学生に返してくれる。

5 ポートランド州立大学サマースクール

ポートランド市の中心部近くに、ポートランド州立大学がある。1983年の夏、平野はその大学の講義を幾つか履修することにした。サマースクールは、秋学期 (Fall Term)、冬学期 (Winter Term)、春学期 (Spring Term) と違って、誰にでもその門戸は開かれている。ターム・ペーパー (Term Paper) を提出し、試験を受けて合格すれば、他大学に通用する単位を取ることできる。外国人学生にとっても、TOEFLの点数は必要なく、学生ビザも必要ないので手軽である。このサマースクールは、6月20日頃から8月20日頃までで、前半と後半とに分かれ、それぞれが約一ヶ月の集中講義が多い。

夏には、特に学生の興味・関心に応えるような特別テーマを設定しているクラスが多い。例えば、このとき平野は「核兵器に代わる平和の選択」というクラスを履修している。このクラスは、本を使つての講義というようなものではなくて、大変ユニークな授業であった。講師は、時間的に短い期間であったのに様々な講師をゲストスピーカーに招いた。地元出身の国会議員に来てもらい、アメリカの安全保障について話を聞く会を開いたり、平和運動に従事している人が来て、アメリカの通常兵器、核兵器の実状について話をしたりした。

その頃、当時のソ連のモスクワで、アメリカの学生とソ連の学生が討論をした。その模様が衛星放送で、教室に備えられた大型テレビ画面に映し出された。討論は英語で行われたが、ソ連の学生の英語の上手さには驚かされた。互いが相手の言い分には偏見がある、誤解だと主張し、内容的には平行線を辿るものであったが、青年らしい快活さと、互いの友好を求める情熱が感じられて、米ソ関係の未来を暗示するものであった。

クラスには七十歳位の男性聴講生がいて、その人は第二次世界大戦中、太平洋を戦場とする従軍兵士であったために、戦争を知らない学生たちに向かって、自分の体験を通して戦争の恐ろしさを語った。このように、サマースクールは非常に充実していた、という印象を今でも持っている。

ポートランド州立大学には、高齢市民聴講制度というものがあって、六五歳以上の市民が授業料免除で (講師に申し出ること) で、自由に授業を聴講することができた。宿題のレポート

を提出する必要もなく、期末テストも受けなくてよいが、授業中に教師に質問をしたり、自分の意見を述べることは自由だ。高齢者は経験も知識も豊富で、授業で発言してもらおうと、若い学生たちにも、時には教員にとっても参考になり刺激になる、とアメリカ人たちは考えていた。

6 ワルトン先生の「現代日本史」

二回目にポートランドに行ったのは、1992年3月で、この時は修士課程の二年間を修了して学位を取ることが目的であった。研究テーマを日米関係に絞り、それも太平洋戦争期を選んだ。そこで最初に受けた授業が、女性教師、リンダ・ワルトン (Linda Walton) 先生の「現代日本史」の授業であった。アメリカにいるのだから、授業は全て英語で行われる。英語ではアメリカ人になれないが、現代日本史の知識においてはいささか貢献することができる、と考えたのである。

アメリカの大学では、基礎科目の100~200番代のクラスから、400番代の専門性の高いクラス、セミナーや論文指導の500番代の授業、というようにクラスはレベル分けされている。400番代の授業では、四年生の学生と大学院生と一緒に授業に参加する。レポートの種類や量が、大学院生の方が多くなる。ワルトン先生の400番代の授業に、面白い学生がいた。この大学の歴史専攻の修士課程に入る前には、カリフォルニア州で三つの新聞社で記者をしていたという、48歳のジョン・アンドルーズ (John J. Andrews) である。ワルトン先生の授業の研究発表の時間に、アメリカの広島・長崎への原爆投下の是非について発表したいと言う。そこで、日本人の平野に意見を求めてきた。大学の図書館の入り口の通路の、ちょうど腰掛けるのに都合のよいへりに座って、約一時間程話し合った。私は、核兵器は大量殺戮兵器で、如何なる条件下にあっても使うべきではないと強調した。また1945年の夏は、これ以上の戦争続行が困難であった日本の状況と、ソ連参戦という二つの重要な要因についても語った。彼の発表は、二十数人いたアメリカ人学生から大きな反響を得た。アンドルーズのレポートは元新聞記者らしく、賛否両論を展開して、それでも原子爆弾は人道問題があると締めくくり、最後の結論は発表を聞く学生の判断に任せるといったものであった。教室は賛否両論に分かれ、熱のこもった討論が続いた。特にデイブ (Dave) という海兵隊に長くいたことのある学生が、原爆投下が必要であったことは、実際に戦争に行き生死をさ迷う経験をした者でなければ分からないと、強硬に原爆必要論を主張してきた。これに対して、若い二十代の学生たちが反論したが、それは発題者アンドルーズの論点からであった。アンドルーズはクラス討論後、興奮して、このテーマはすごい、これについて本にまとめれば必ず売れる、二人でこのテーマで共同研究をして修士論文を書こうと提案してきた。私はこの申し入れをまともに受け取って、「原爆は終戦に必要であったか」というテーマで修士論文を書くことにした。ところが、彼の方は「1948年のカリフォルニアでの金鉱の発見」という題で論文を仕上げると、ずっと先に卒業してしまった。

アメリカ人だから書くのが早いというわけではないが、彼は元新聞記者だったためか、多くの資料を寄せ集めて、20ページぐらいのレポートでも (日本の400字原稿用紙とは違って、英文タイプの1ページはかなりの量になる)、簡単に1週間位で仕上げる能力に富んでいた。

7 大学新聞 Daily Vanguard

PSUの大学新聞は、*Daily Vanguard* という名の如く日刊で、12ページ仕立てである。内容は、“OPINION” “NEWS” “SPORTS” “CLASSIFIED ADS” “CALENDAR” と大変盛りだくさ

んで、充実していて楽しい。第2ページ目の“OPINION”の中に、さらに“Letters to the editor”という欄があるが、ある日、日本人に向けて、アメリカの原爆投下を正当とする大学生からの投書が掲載された。日本人がアメリカに行けば、必ずどこかでこの問題にぶつかるので、参考までにここに引用することにする。(逆に、鈴木は三年前にハワイを訪れた際、観光バスが「USSアリゾナ記念館」USS The Arizona Memorial Parkというので行ってみると、そこが実は真珠湾 Pearl Harborで、日本人としてすまない気分というか少々複雑な思いに駆られた経験がある。)

Message to Japanese: America was justified in dropping atom bomb

To the editor:

My name is David English, and I am a sophomore at PSU. Recently, I have been following the events leading up to the anniversary, Aug. 6, of the dropping of the bomb on Hiroshima, Japan.

I am the grandson of one of the men that was on the plane. I am extremely proud of what my grandfather did in serving his country. As more information becomes available this year it makes me mad.

First off, the Smithsonian has canceled the large exhibit (“The Last Act: the Atomic Bomb and the End of World War II”) celebrating the ending of World War II. This is a disappointment to the nation because they will not have the opportunity to learn about the war.

These days we, the United States, are seen as the aggressor in World War II, and the Japanese as the helpless ones. Nothing could be further from the truth. An invasion of the Japanese islands would have caused the loss of many millions of lives. In fact, an invasion was planned for November 1945 called operation

“Downfall” (from “An invasion not found in the history books,” James Davis, November 1987).

Second, in a recent article about the upcoming anniversary (*The Oregonian*, March 5, 1995), the mayor of Hiroshima, Japan, Takashi Hiraoka, said “The Japanese did some cruel things in World War II, but I don’t think it can be said the atomic bombings were justified by those cruel actions.” He went on to talk about a “plan” to expose Americans to what he considered (or maybe the Japanese government considered) the correct view of the bombings.

My response is we don’t want your imperial excuses about the bombing 50 years ago, and don’t expect an apology either. Fact, the Japanese started the war. Fact, the Japanese had millions of people ready to fight if the United States had invaded Japan. Fact, the Japanese were forewarned they faced the “Ultimate De-struction” in the Potsdam Proclamation, 1945.

I think the government and the people of Japan should commemorate the anniversary in their own way and not put in their two cents about how we commemorate or don’t commemorate the anniversary. It’s an anniversary of what I consider the bravest of individuals, who completed their mission and ended the war.

David English

sophomore

[*Daily Vanguard*, March 7, 1995.]

この大学2年生の投書を受けて、平野も大学新聞に投書をした。大学新聞側が、“**Ending war no justification for dropping atom bomb**”という題をつけてくれた。

Reading a letter to the editor on March 7, “America was justified in dropping atom bomb,” I felt like writing a response to this letter. First of all I would like to point out that the Japanese people criticized the United States use of the atomic bombs on Hiroshima and Nagasaki because the atomic bomb is a kind of weapon that should not be used in any circumstances. Please imagine a bomb which would evaporate and melt tens and thousands of people instantly, and cause great pain and gradual death to a much greater number of the civilian population. Even today some survivors are suffering from diseases related to the atomic bombing. Also, the genetic influences from the bombing in the offspring of survivors must be pointed out.

It is the prayer of the Japanese people that in the future no one on earth will encounter the disaster from the use of nuclear weapons and we will be able to eliminate these horrible weapons as soon as possible from the earth.

In the letter, the writer says that the atomic bomb ended the war. Actually the war was near the end before the bomb was used. After the battle of Okinawa, the Japanese Navy was almost extinct, war planes were almost used up in the battles of Pacific islands. In the condition of the blockade, Japan did not have enough oil and planes to fight the war. Above all the Japanese leadership feared the internal social chaos resulting from war weariness and food shortage. Many Japanese sources say that the August 8th Soviet entry into the Japanese war actually prompted the Japanese surrender.

For the justification of the use of the atomic bomb, the writer says that the Japanese were warned beforehand in the form of “the Potsdam Declaration,” which was issued July 26, 1945. However, the specific term of “atomic bomb” was omitted in this document, and further, the clause for guaranteeing the retention of the Emperor, which Secretary of War Stimson mentioned was vital for the Japanese acceptance of the terms, was deleted right before the issuance of the declaration. It was easier for the American decision makers to predict the reactions to the declaration than to predict the weather over Japan in those days. Also, the important thing was that the American leadership knew the Japanese had requested the Soviet mediation, while the Soviet Union was actually preparing the war with Japan.

I agree with the writer at one point. He regrets the Smithsonian’s decision of scaling down the exhibition of the atomic bombing, saying that “This is a disappointment to the nation because they will not have the opportunity to learn about the war.” I think, however, that the Smithsonian exhibition is not the only place to learn about the war.

According to a Japanese newspapers, right now, the Japanese Parliament (equivalent to the American Congress) is preparing for a special resolution in which Japan will apologize to the

Asian and Pacific nations Japan invaded in World War II. The Parliament still has to overcome the strong opposition of some conservative representatives who are still dreaming of the glory of the past Japanese Empire.

I hope that this year, the 50th anniversary of the end of World War II, will become the occasion for reconsideration of the war, and the starting point for building world community based on mutual understanding and friendship, without depending on the deterrence by nuclear weapons. I think that this is the only way in which we can console the souls of tens of millions of victims of World War II.

Atsuo Hirano is a graduate student in History.

[*Daily Vanguard*, March 31, 1995.]

これを読んだアメリカ人学生はどう思ったか分からないが、これに対する投書は来なかった。

8 「大工」兼「院生」のジョン・カヌービ

同じワルトン先生のクラスに、全く別のタイプの学生がいた。42歳の院生で、彼はクラスを長く休んでいるかと思うと、また出てくる。後で分かったことであるが、家を建てる仕事が入ると大学の授業はもう欠席する。仕事が暇になると、勉強に集中して取り組むというポリシーであった。そこで修士課程に在籍する期間も自然と長くなってしまふ。このように、カヌービ (Konope) のようにアルバイトではなく、本格的な職業を有しているアメリカ人の学生は大学院で90%以上、四年制の学生では70 - 80%位はいただろうか。授業が終わってから、会社に直行するという女子学生から、今からお店に魚を売りに行くという学生まで、仕事の内容は様々であった。

カヌービはアンドルーズと違って、スピードを上げてレポートを書くというタイプではなく、強い倫理観を物差しに、納得のいくまで深く掘り下げて物事の核心に迫るという姿勢であった。彼のテーマは、「カリブ海におけるイギリス人の奴隷貿易」で、黒人奴隷の存在は白人の罪を表していると考えていた。そして、シェイクスピア (Shakespeare) の『あらし』 (*The Tempest*) に出てくる島で、人間扱いされない怪物は、実は黒人奴隷のことを言っているのだと主張した。そこで、文学作品は歴史の論文の材料には使えないという教授と対立したが、彼は一步も引こうとはしなかった。こんな頑固な所が、彼がいつまでたっても修士論文を仕上げられない原因の一つになっていると思われた。

彼の正義感はアメリカの原爆投下は間違いであったという信念をも生み出し、私の論文テーマにも大いに興味を持ってくれ、質問もしてくれた。私はそれに答えようとして、一生懸命に適切な英語を探して話す。仕事の暇などときには、外国人との時間のかかる話もいとわずに熱心に聞いてくれたので、私にも英語のディスカッション能力が少しずつついてきたと思われる。話しているうちに、自分では今まで考えてもいなかったような新しい考えに辿り着き、それをノートにメモし、文章にすることもできた。またそういう議論に触発されて、図書館で関係する書物を探して読み、自分の考えを立証したいという気持ちにも駆られる。人と良い議論をすることが、良い論文を書くことにも繋がるのだということを、ここで改めて実感させられた。

9 英語の文章を書く難しさ

日本人の留学生は、英語を使うという環境の中で色々な困難に出会うが、中でも一番難しいのは英語で文章を書くことである。日本の中学校・高校でも英作文を学習する。ところが、アメリカの大学・大学院で要求される英語のライティング能力とは雲泥の差があり、分量的にもはるかに多く、それに加えて論理の発展と強調点を有する内容、また実証的な書き方が要求される。論文の指導教官のパーク (Burke) 先生に、事実だけを並べて書くのではなく、もっと分析したり、推論をしたり、判断の軌跡のある文章にするようにと助言された。この先生にはよく“a”と“the”を直されたが、“a”を書くべき所に“the”を書き、“the”を書くべき所に“a”を書いて直される。何も書かない場合もあるし、複数の“s”を付けた方が良い場合もある。日本人学生の中には、これはもうしかたがないと諦めている人もいた。

アメリカの大学では、ライティングというものが非常に重要になってくる。多くの定期試験で、ブルーブックという青いノートの上に、小論文を書くような問題を出されることが多い。それにターム・ペーパーは10枚も20枚も書かされる。アメリカでは卒業した学校の名前よりも、どこの学校であれ、成績がより重視されるので、良い英語が書けることが大変重要なことになる。そこでどの大学でも、英作文添削指導所 (English Writing Laboratory) というのが構内にあって、ライティングの苦手な人、書いた作文を添削してもらいたい人はここに相談に行く。お昼の11時半から1時までが「ウォークイン・タイム」(Walk-in Time) と言って、文法などの問題の時間のかからない学生が行く。9時から5時までの時間は、20分～30分の単位で予約制になっている。事前に来て、入り口に置いてあるスケジュール表の空いている時間に名前を書き入れ、希望する先生の名前を書いておくだけで、その時間にその先生の指導を受けることができる。先生は、英文科の院生がアルバイトでやっている。病院に通院するようなもので、見てもらう前にカードに自分の英文のどこに問題があり、どこに提出するためのものか、どの授業のものかを書くようになっている。母国語は英語か、それとも何語かを記入する欄もある。元々はアメリカ人学生のために設けられた制度であったが、外国人も多く利用していて、予約の記入簿を見ると、利用者の半数以上が外国人、それも日本、韓国、中国、台湾出身者が圧倒的に多い。アメリカ人の中でも、東アジア出身の学生は勉強熱心で、成績も良いと評判になっていたが、それは、この“English Writing Laboratory”の利用状況にも現れている。

英文で直されるのは、“a”や“the”のような文法事項だけではなく、文法的にはまちがっていないなくても、アメリカ人はこうは言わないというような表現を直されることがある。鈴木の実験でも、教師はよく「留学生の英語」と言っていたが、留学生は本国から持参した英語の辞書を頼りに単語を並べて書くので、アメリカ人が実際に使っている表現とはかけ離れた変な英文になってしまうのである。そこで、良い文章を書くためには、良い英文を読むことと、文法能力、語彙力が総合的に必要になってくる。

平野の書く英語は、日本語を英語に直訳した表現が多かったようである。“English Writing Laboratory”は使用料を払う必要はなく、大学がその経費を賄っていた。

学生会館の広告掲示板に行くと、「1時間10ドルで英作文の指導をします」というチラシが沢山はってある。日本では1時間5～6千円は取られるかもしれないし、それも英会話の練習になると思い利用した。アメリカに行けば、即、英語が習得できると考えるのは、早急である。買い物や道を尋ねる、といった程度の英語を覚えれば良いというものではない。議論をしたい、論文を書きたい、となれば、可能な限り多くのチャンスを自分からみつけて、それを有効利用しなくてはならない。

しかしまた英文でペーパーを書くことに慣れてくると、アメリカの大学も少しは居心地が良くなってくる。900ページ近い論文を書き、Ph.D.も取り、スタンフォード大学フーバー研究所の主任研究員になられた西鋭夫氏が、留学当時を述懐して次のように書いている。「英会話はできなかったが、私は英文法をみっちりと日本の中・高・大で教えられていたので、文章の土台はできていた。単語もたくさん知っていた。研究調査は大好きだった。……ドクター・エデルスタインは、私の提出したターム・ペーパーを手に持ち、しばらく私の顔を凝視した。彼自身の頭の中の整理に懸命になっている表情だった。“Great Work”と彼は微笑んで私を褒めた。彼の凝視には、英語もろくに話せない留学生がなぜ大学で使う単語で論文が書けるのか、という複雑な気持ちがあったのだろう。彼の態度が変わった。」^{vi}

10 国際交流センター

大学の中に「国際交流センター」があり、留学生の面倒はほぼここで見てくれる。外国人学生の出入国の事務的なお世話、アメリカ人の友達やホストファミリーの紹介、休日や休暇中のホストファミリーだけではなく、いわゆる下宿先も紹介してくれる。キャンパス内に様々なタイプの滞在施設があり（普通の家型、寮型、日本的に言えば高層マンション型）、値段も新旧により様々だが、残念なことに快適になればなるほど、コンクリートの部屋に自分ひとりとなってしまう、日本にいるのかアメリカにいるのか分からなくなる。鈴木はそこで、大きな家に住んでいたアメリカ人老夫婦の家の二階の一室に下宿させてもらい、朝食と夕食もおいしいアメリカ料理を作ってもらえたので幸運だった。平野も英語を覚えるために、アメリカ人の家族を紹介してもらった。ビル・パーカー（Bill Parker）とその連れ合いのジョー（Jo）、25歳の息子のダン（Dan）、養子の3歳の息子ジェイコブ（Jacob）の4人家族であった。他にも、日本人、韓国人、アラビア人などの下宿生がいて、そこでは同国人であっても英語で会話をするというルールがあった。このルールは大変酷であったが、大切なことだとも思う。このアメリカ人家族と暮らして、テレビや新聞、本だけでは分からないアメリカの生活をよく理解することができた。

パーカー家は大変開放的な家族で、10月末のハローウィーン（Halloween）、11月末の感謝祭（Thanksgiving Day）、12月末のクリスマス（Christmas）には、親戚、知人、近隣の人々が集まって、簡素な食事ながらも、共に食事や会話を楽しんだ。ハローウィーンの夜には、近くの人の子供たちが母親と一緒に窓辺に置いたロウソクのともったかぼちゃの飾りを見て、ドアをノックし、ジェイコブが玄関に走って行ってお菓子を渡す　こういった光景が特に日本人留学生には印象的であった。その前夜、かぼちゃを一個もらい、ナイフで目と口を開けて顔を作るといった初めての体験をした。

11 スピーチ・クラブ：“ Toastmaster ”

大学の中に「宴会司会者」（Toastmaster）というスピーチ・クラブがあったので、これもスピーチ能力を伸ばしてくれるかなと思い、飛び込んだ。10数人の参加者が隔週ごとに集まり、交代で役割分担を果たす。司会者、計時係、「アー、ウー」を数える係、目線とジェスチャーをチェックする係、審査・講評係、とスピーカー（話者）である。平野にとっては、スピーチの技術以前に、5分間のスピーチを聞いてアメリカ人の考えていることを知ることができたのが収穫であった。アメリカ社会についての理解を深めることもできた。二回順番が回ってきた

が、「日本の平和憲法」「外国語の能率的な学習法」という内容でスピーチをした。参加者全員が、メモ用紙に短評を書いて渡してくれた。

12 大学院の最終審査

専攻科目が歴史であったので、図書館で過ごす時間が多くなり、本が相手となった。すると、自分はせっかくアメリカに来ているのに、これで良いのかという気持ちに襲われた。

留學生活の最後に、四人の教授による論文最終口頭審査 (Thesis Defense) があった。「防衛」(Defense) という言葉が使われているように、修士論文の弱点や疑問箇所に関する、四人の先生方の質問に防御しなければならない。テーマが、「アメリカはなぜ原爆を使ったか」というものであったので、「特攻隊」の例に見られるように、日本には徹底抗戦の意志があったので、アメリカが原爆を使用したのも無理がないのではないかというような質問に、即座に反論しなければならない。

この口頭試問がすんで、四人の先生方に一人ずつ「あなたは論文の審査に合格しました」と言って握手をしていただいたときには、本当に感無量であった。このとき、若いときからずっと使える英語のために勉強をし続けてきて、教員としては退職もして留學し、勉學を続けてきたことがやっと報われた思いがした。「意志あるところには道がある」(Where there is a will, there is a way.) の諺にあるように、誰にでも、どんな年齢の人にも、どこの国の人であれ、門戸を開き、勉強に適した環境を整え、援助を惜しまないアメリカの大学の開放性に、頭の下がる思いがした。(平野)

13 おわりに

明治時代には政府の派遣留學生が太平洋を船で渡り、それからはフルブライト奨學金を得た留學生たちが、そして次第に円高に伴って私費留學生が増えていった。日本の大学では受けられない、よりレベルの高い教育を受けるために留學していたのが、最近では日本の大学に入れないのでアメリカに行くというまでに學生層は広がっている。長期の留學の他に、ホームステイや研修旅行を主体とした短期留學、高校への留學、専門学校^{vii}や英語学校への留學、ただなんとなく、といったものから、最近ではOL留學^{viii}、キャリアアップ留學^{ix}、スペシャリスト留學^x、リフレッシュ留學^{xi}まで千差万別である。

世界観光機構の発表^{xii}によれば、2020年には海外旅行者は三倍になり、宇宙旅行も花盛りになるというから、留學も当たり前の時代になるだろう。世界中に幾つかの姉妹大学を持つ大学が増えてきていることから、単位交換、単位認定、夏期の短期留學プログラム^{xiii}、共同授業等、ますます緊密な関係が迫られるであろう。日本の大学自身が唱えているように、日本の大学自身が国際化せざるを得ない時代、日本の大学の良い伝統を残しながらも、世界の大学のレベルに追いつかなければならない時代である。特に、アメリカの大学との関連で言えば、アメリカの大学の大衆的性格^{xiv}はもうすでに日本の大学の中に受け入れられてきているが、さらに、どのアメリカの大学にも共通な基底である「生活に直結した実用主義」^{xv}を、日本の大学がどこまで導入するか、といった問題も残されているだろう。研究を中心とする大学院、教育(人間教育と職業教育を含む)を中心とする一般大学、そして教育といっても大学生に対する教育のほかに、多様な社会教育に対するサービス活動も求められている。また、大学の国際化を論じるときに、国際語としての英語の問題も抜きにしては論じられないであろう。新しい大学の

創造と共に、この問題も課題として残存し続けることは間違いない。(鈴木)

-
- i 18歳人口の減少を日本よりいち早く迎えたアメリカの大学は、それぞれ工夫を凝らして学生集めに励んでいる。その一環が社会人学生と外国人留学生の確保である。例えば、1963年に設立されたカトリック系の私立大学である、コネチカット州にあるセイクレッド・ハート大学 (SHU) は40学部にて2200人が学ぶ大学だが、夜間にもMBAコースを置き積極的に社会人を迎えている。また外国への募集担当者を二名おき、65か国から120名の留学生を集めている。(『英語教育1997年9月号』大修館書店、53-56ページ)
 - ii ペンシルバニア州立大学での英語学習については、拙論参照。Atsuo Hirano, "Learning Communicative English in America" 『愛知大学外語研紀要第23号』(*Journal of Foreign Language Institute*, No.23, 1997) 123-9.
 - iii 応募資格は、日本の国立の教員養成大学・学部の第3学年に在籍し、卒業後、小・中学校などの教員になる者。期間11ヶ月以内、奨学金は北米13万5千円(月)、ヨーロッパ・オセアニア8万円(月) + 往復旅費。募集人数は106名。問い合わせ先は、在籍する大学、または文部省学術国際局留学課。大学の推薦による。ICS国際文化教育センター編『最新アメリカ留学ハンドブック』(大修館書店、1993年) 65ページ。
 - iv 例えば、東洋英和女学院大学の4年次選択英語は、アメリカの大学院レベルのディスカッションに参加できることを目標に意図され、授業では様々な問題を取り上げたり、語彙力の増加を図っている。鳥飼玖美子・進藤久美子『大学英語教育の改革 東洋英和女学院大学の試み』(三修社、1996年) 98ページ。
 - v 『平成7年度 静岡県立大学短期大学部 自己点検・自己評価報告書』(5ページ)による。注記には、「学生の勉強時間の短さに驚かされる。しかし、これは2年生の4月、1年生の9月~10月の時点における数字であるので、文化教養学科、第一・第二看護学科においては、卒業研究が本格的になる2年生の後期になれば勉強時間ももっと増えるのではないと思われる。」と記されてある。
 - vi 西鋭夫『富国弱民ニッポン』(広池出版、1996年) 229ページ。『英語教育1997年11月号』(大修館書店) 57ページ。
 - vii アメリカの専門学校には、内容別に分類して、「ビジネス」「保険」「メイキャップ・アーティスト」「ヘアスタイリスト」「ファッションデザイナー」「テキスタイル」「ファッションビジネス」「インテリアデザイン」「アートスクール」「レコーディング・アート」「テレビ・放送業界」「工業技術・工芸」「パイロット・航空整備技術」「スチュワーデス」「旅行業務」「通訳・翻訳」「コンピュータ」等がある。前掲書、『最新アメリカ留学ハンドブック』148-52ページ。
 - viii 働く女性が生活の転機を迎えるのは25歳から30歳の間、就職して3年から5年頃。2~3年働けば一年程度の海外留学は可能。働く女性の留学は明らかに増加している。国際文化教育センター(ICS)の調べによると、10年前に留学生の7割が男性だったのに対して、5年前には男女ほぼ同率。現在はその比率は完全に逆転し、女性が多数派になっている。中でも働く女性の留学の増加が顕著であるという。国際文化教育センター編『OLキャリア・アップ留学』(三修社) 9-12ページ。
 - ix 3ヶ月~1年の短期間の場合、例えば、イギリスの英語学校のスペシャル・コースには、「秘書コース」「ビジネス英語コース」「コンピュータ英語コース」「銀行業務英語コース」「旅行業務英語コース」「ホテル・レストラン業務英語コース」などがある。オーストラリアの英語学校のスペシャル・コースは、それ以外に、「科学技術英語コース」「医学英語コース」などを有している。そこで学びつつ、短期留学中にその成果をはっきりと形に残すために資格を取得してしまうことだ。1~2年の留学なら学位取得を目指す。アメリカの短期大学の職業専門学校、資格取得コース、アメリカのビジネス系専門学校、

オーストラリアのビジネス・カレッジ、アメリカのビジネス・スクール（経営学部の大学院）でMBA（経営学修士）取得、等が考えられる。『OLキャリア・アップ留学』15-35ページ。

- x ある程度基礎的な知識や技術がある人がさらに腕に磨きをかけるための留学。いわゆるアート関係の分野が多い。このスペシャリスト留学先は、専門学校への留学か、短大の職業訓練コースへの留学が適当。例として、「イラストレーター」、「インテリア・コーディネーター」、「キュレーター」、「グラフィック・デザイナー」、「ジモロジスト」（宝石鑑定士）、「パイロット」、「ビューティーセラピスト」、「フローリスト」、「ヘア・スタイリスト」、「ファッション・デザイナー」、「フォト・グラファー」等がある。『OLキャリア・アップ留学』36-8ページ。
- xi 勉強も遊びもとことんやり、色々な人と友達になり、異文化をどんどん吸収したいという「生活体験」がメインの留学。「英語＋スポーツ」コースや、外国の伝統行事体験、料理の短期実習コース（仏）、働く女性のための英語&リラクゼーション・プログラム（英）、ニュージーランドでのファーム・ステイなど様々である。『OLキャリア・アップ留学』41-8ページ。
- xii 世界観光機構10月23日発表の報告書から。（静岡新聞、1997年10月24日）。
- xiii セイクレッド・ハート大学は、夏期にESLの夏期講座を開設すると同時に多くの団体に施設を貸し出している。その使用料は大学の財源にも繋がる。施設を利用する団体の一つとして、日本の桜の聖母短期大学が2か月留学プログラムをそこで行う。（『英語教育1997年9月号』大修館書店、53-56ページ）
- xiv 「アメリカの大学の大衆的性格は、大学のサービスと呼ばれている夏期大学、公開講座、通信教育などの発達のうち認められる。」『ブリタニカ国際大百科事典12』（ティビーエス・ブリタニカ、1974年）113-5ページ。
- xv 「民主主義を強調するアメリカの大学教育は、研究的雰囲気をやや稀薄にする一方、科学の大衆生活への応用を主とする実用主義的性格を濃厚にしている。」例えば、コーネル大学が先鞭をつけたホテル経営法専攻の実習では、ホテル経営に関するあらゆる実務を経験させることになっている。このような大学教育の実用化、職業化の傾向は、大学院にも及んでいる。大学での教授方法も抽象的な理論よりも実際面を重んじ、大学生の実習や研究の態度も著しく实际的である。「特に学生が休暇中に、鉱山、病院、工場、農場、商店などで労働に従事するのは、アメリカ社会の通念となっている。学生ができるだけ自活の計を立てることは、アメリカ民主主義の伝統的信条の現れである。」（『ブリタニカ国際大百科事典12』、115ページ）

[1997年10月30日 受理]

